

婦人と子ども

第貳卷第四號

(明治三十五年四月五日)



(本欄は凡て轉載を禁ず)

骨ものがたり(つゞき)

やまとの翁

誰の手にも合わなかつた所の
 あれ程の古猪をば
 苦もなく射殺して、退治したもんですから、美彦わ
 大喜び、これも偏えに、神様が自分のすなをなのを
 恵んで下さって弓と矢とを授けて下さったからだ

思つて、非常にありがたがつて、さーそれから直ぐ、この野猪を殿様の處え持つて行つて御目にかけてよーとゆーので、大な野猪の死骸を脊負つてぼつ／＼山を下りて歸りかけました。

處がだん／＼と行つて、山の麓の處え來た所が、そこに一軒の酒屋があつて、そこで兄さんの猛夫が一人でグイ／＼とお酒を飲んで居る、よもや弟が行つたつてあの怖ろしい古猪を退治することが出来やしまい、今にこの兄が一番に退治をして、殿様のご褒美を頂いて見せるなど、至極太平樂をい

っで居った。そこを以て弟の美彦が、野猪を脊負
 て、勇ましくやってきたものだから、猛夫わ屹驚し
 て、もー羨しーやら、妬ましーやらで堪らなくなつ
 た。

けれども面にわそんな風わ些も見せない、態
 と大變に嬉しー様な風をして、

猛夫「やー美彦、お前わ己の弟だけあつて中々強い、
 よーまー、この古猪が苦もなく、退治が出来たもの
 だねー、さー、こゝえ來てお酒でも、一盃飲んで、
 休みなさい」

こーい ったもんだから、美彦もまさか、兄さんが

悪企があるーとも思わない、眞實に喜んでいって呉れたのだと思ひましたから、

美彦さー兄さん これもね、白い髯のお翁さんが出て来て、弓と矢とを呉れたもんですから、全くの所

夫で退治ができたのです』
 といつて、悉しく猪退治の物語をしました。

慈者の猛夫わ、前から黙って美彦のお話を聞いて居りましたが、もとより腹に一物がありますから、態としきりに感心をした風をして、無暗に弟にお酒

を勧めて飲ませる、そしてだんくど日が暮れるま
 で、美彦を引き留めて居る、美彦は何も知らないで、
 勧められるまゝに、お酒を過して居ると、だんく
 遅くなつてしまつて、さう歸ると猛夫が言つて、
 二人で蓮れだつて其處を出た時分にわ、も一日がズ
 ッポリ暮れてしまつた。

それから兄弟連れだつて、そこを出て暗い山路
 を通つて歸りかかつた所が、夜の事でもあるし、山
 道でもあるから、丸のきり人通りとゆゝものわなく
 つて、實に寂しーことゝいつたら、譬え様がない。



そこで、猛夫わそーッと周回を見廻わしながら一歩
 下って、弟が猪を脊負して、何心なく前え行く所を、
 突然後から抜打に刀で斬り付けた。
 お酒にわ酔して居るし、重いものを脊負って居る
 し、おまげに後からの不意打だから、身を交すこと
 も出来ない頭の真中から斬り下げられて、可愛相
 に美彦わ、アツといつたなり殺されて仕舞つたので
 す。

猛夫わ一人で、ヘン、甘く行つたな」と獨言しながら
 静に地面え穴を掘って、美彦の死骸を見えない

様に埋めて置いて、夫から猪の死骸を自分に脊負一
 て、大急ぎで殿様の處へ行つて、自分が猪を退治し
 てこの通り持つて参りましたといつて、お届をしま
 した。

殿様わ御様子を一向にご存じがないから、大變な
 御賞めで、早速猛夫をお取り立てになつて、立派な
 お士にして呉れた。それから、猛夫わ自分の弟め、
 可愛相に同じ様に猪狩りに行つたのだが、と一く
 猪に殺されて仕舞つたのだといつて、皆を欺してお
 ったのです。

けれども悪い者わ、何時までも善くわ行かない。それから何年か経った後で、一人の百姓が、丁度美彦の殺された山奥を通りかゝった時、眞白な一本の骨を拾ったので、何か獣の骨でもあろうと思つて家え持つて返つて夫を細工して煙管の吸口に拵らえた。處が不思議……實に不思議だ、其煙管で以て煙草を吸つた所が、其骨が忽ち歌を歌い出したのです。私の兄さん酷い人、私を殺して骨にして、私の殺した野猪を、とーく自分の物にした、怨めしー兄さんや、怨めしー兄さんや

さー大變だ 骨が物言ー出した、獨りで歌をうたい出した、こんな不思議なものわない、これわすぐ殿様に献上しよーとゆーので 早速殿様え持つて出ました。

何だつて骨が物ゆーとゆーのですから、殿様も余程不思議に思し召されて、檢して見ると、やっぱり其通り、處で殿様わ、『ハッ』とお考え附き遊ばされた。『これで見るとあの猛夫とゆー者が、怪しいわい』と覺し召されたもんだから、直様猛夫をよび出して、猪狩りの時の弟を殺した事を、お調になつた、所が猛

夫おわ中なか々白はく状じようをしな、い、そんならとゆいので、彼かの
 骨ほねの煙えん管かんをも持もち出だして、物ものをいわせたもんだから、
 ささすがのた猛たけ夫おも、隠かくすことが出で来きないで、と一いく
 悪わるい事ことをめ残のこらず、白はく状じようしてしまいました。
 そこでと殿との様さまわ、以もつの外ほかのお怒いかりで、すぐ猛たけ夫おの
 首くびをき斬きつて殺ころされたが、弟あとうとの美彦ひこの方は、可か愛あい相あいだ
 とゆいので、埋うまつつて居ゐた骨をほ堀ほり起おこして、立り派ぱ
 な墓はかをたて、お祭まつりをして呉れましたとさ
 めでたしく